

兔絲子

十
八尾



根多し如はくしきと十一

河合宗臣輯録

一凡天地山川社稷五祀の類を神といふ天神地祇といふ天地を分ける名
目也神といふ通名人の死する神霊を鬼といふ今をたつ鬼神といふ
凡鬼神とあるは己をたつ鬼神といふまじき鬼神といふこと
則ち事孔法に肝要といふこと鬼神といふを聖人の定むるに
也天子の下の王はたつ鬼神といふ鬼神といふ鬼神といふ鬼神といふ
つらねることを定めてこれを祀典と云諸君より天子より下をせしめて
あるべき鬼神は制限ありこれを令祀といふ令祀の外

みは罪がしきハこれと云ふは、高家の女子今日の事あらう。以故
ならしと又ハ割^{サカ}はん事能はし聞かハ貴殿を傷^{イタ}く思はせんと
や是を殺^{コロ}し、案ハ猶^{なほ}あるを殺^{コロ}し、何の氣持^{きもち}あるんぞと逃^にか
ふ女子と人質^{にんしつ}とあらうと人を斬^{きる}る言^{こと}も空^{そら}なりて卻^{かへ}てそ
あつてんぞ死期^{しき}と武士の無念^{むねん}あるべき事^{こと}の推量^{すいりやう}あるは貴殿より
思^{おも}く一命^{いちめい}と惜^{おし}むるハあつて人を斬^{きる}る者^{もの}ありて棒^{ぼう}と持^もて
後^{のち}より面^{おもて}にあらはる細^ことあらハ隙^ひ

おしと暗きもて小雨ふきハそは方と不見え、若き者云ふくそは民家の
馬とつらきを、あつてさきより何しの細きて、おととお國と定め跡とけ
しと、一付着あふ、いふに、とあると、え、たう、後多、山の中は三節
と云、松浦士、伏見の川舟、は、さる、東、神、山、中、は、年、は、舟、さ、か、や、れ、事、の
筑、柴、方、の、所、衆、を、總、て、ぬ、く、さ、う、は、後、強、く、い、き、け、り、る、不、得、已、し、と、如、し
聞、争、は、及、ぶ、怒、と、罷、く、義、と、料、り、悪、言、と、あ、い、事、を、お、も、う、び、た、と、い、お、果、
と、と、金、と、失、は、し、死、ハ、人、の、重、事、なり、通、す、と、切、は、輕、之、ハ、狂、夫、と、謂、
つ、べ、し、室、主、大、猫、の、噬、令、は、似、る、者、多、し、
一、か、く、放、し、お、の、手、筋、だ、る、者、あり、ぬ、き、者、は、斬、之、
んと、不、得、し、と、さ、ハ、太、刀、業、の、事、ハ、い、き

加を積て千人の將とる騎士これに副ふに時が何百名鉄炮何十挺など云
求^{ツカユル}住者八^{ツカユル}理^{ツカユル}（^{ツカユル}）^{ツカユル}此世とて是の者死るをぬき君を奉るとんて
計けらるる妙はさばさうあるに因茲辞ある者詞なくして今も誰
あつたれと兵法軍議と不解く以是^{ツカユル}名は本者者ハ是武の
道の裏へるるあり

一 神君怒て侍臣と云ふの時本多正信とて何れかあて殿ハ何より腹
立ちらるるにハ 神君卿には涙と嗟^{カミ}ち

とて五六月待てどもとて八熊沢をいさぐいし和ぬるを經るも相とてとて
我相林と云わたりと事よりいへし幸承の事や久しと創とある事訓、年
亦もせよ武士のいさびやうか、詞の又入る喉と云ふ中、以初と遠、ド、
為る事と各のあそびととせしと云ふ、一、退む心出ず、いふは上、とて
子止せざれ武士の心、多し和解の所、愈々あそびとせし和解、何れ
我も、一命と不意に拾ひとて、あそびし人心、誰と死と急めんや義
依て存んといひ、後けり長を依て別とせん、もかふとて、刀とて、
東國、いひ人とも、と、金今の面相、心とせし果とて、子者、あそびとせし
とる材林、意とて、材林、心とせし往て告之、おま、あ、い、長村、心とせし
七、七、材林、意とて、い、何の、心とせし、と、材林、心とせし、和、義、調、
希代の奇、切、り、也

一 人五十二代後鳥羽院のゆかり、高直、母家永、心とて、五色と相撲、心とて、
と、と、別、高直、風、寛政三年、金、と、六月、上、日、上、院、心とて、
先祖、と、右

一 件、た、り、と、し、託、
○ 横網之計

谷風の計、傳授之、

象、

一 横網、

古者、谷風、枕、心、依、相撲、心、依、令、授、與、年、以、第、行、入、
前、迄、相、用、
仍、此、件

寛政元年、
年、十一月、十九、日

中、明、相、撲、心、
同、所、以、事、十九、代

在、田、追、風、
判、
朱、印

小野川の證狀之、

證狀

當、同、心、
第、一、所、抱

小野川、
志、二、所

石川喜三郎今度相撲力士故實門外玉加
仍修狀如件

寛政元酉 正月十九日

本朝相撲之司所仍事十六代

志田追風 判

朱印

右件狀修状をいふは有之奇社奉り牧野傳系守殿所存に付
細川歌中守殿亦年高而後乃答書矣

○吉田追風先祖書 所存付書

夫お僕の祖は天照太神の所降より初り終迄までハ 無仁天皇の御宇
は相撲の所降よりいふこといふこと他法務のいふこといふこと
雖定 聖武天皇神武天皇よりい

一日昔又公嘉平以村名の至とこれ節候守殿に候迄、於てあす十日相撲、
上候より之を御分りさせらるる節有少候。上る且古来、村庭爲節の祭事
お勤山お撲山行事、高遠風車流高云は御神、五里川、其古法之趣
お勤、上は儀場之より御進相撲と云格式等も別、いふ所、
六月十日曉六時竹橋門外門番庭前之趣、お勤山行事相撲人、
子麻下下等、お勤山お

予流るる三坂古法之通勝之方は相渡
九時相撲始り七時午時お餅

○上覧行事之式

右番三人降帷子麻下若用るる古儀場は代りく相結ひ書し指をへお抱
りて侍鳥帽子木剣と帯し追風如古儀入之并折色の高袍侍鳥帽子
用るる古儀の上は延と受をうすて相撲之古実言上は後谷風少野川此の古
古例に依て侍古車風 林葉裏より帰るる儀の折組付る獅子王之儀
と指風折鳥帽子物衣田指の袴と古儀の上は履 所免をお勤り
右に上覧お渡りて南 所番所は木村庄之御式侍之此を投手の貌少
月四番八日の貌様をうすて相合るる儀を依て白洲に於てお裸にお渡りて形を
少見合るる儀に所おるお勤り
右相撲一組の者の少番美として白銀三百枚下し是れは後渡りお勤り
船中も海にさし

一武家百人一首

五首五五の歌なりと云ふ
此の歌は如く

経基王

吾井ち武人ともあはるる我々も我々も

源満仲

君いざしは世をなして海の方のものを得ては

源頼光

かくおんをなまされう大はのちを取返りて波のありを

源保昌

かくの親と親ともいふなりこの子れお代と名ひこそ

平致経

君いざなりはまゝいあやのまゝいなる根をうすけはし

源頼義

君いざなりはまゝいあやのまゝいなる根をうすけはし

治義家

吹風と春をこれ舞いあはれも道にまはる山懐く静し

清原公則

御のまゝの心とて春のぬきと折るのけ乃布れやとのせとてい

菅原頼實

夏の日はちるも消えぬを市春の風やうけて吹く

源仲正

思ふことなれどやまことあるまじし涙も涙るまじき

平忠盛

わんごうの心を世の荒れきるまじしことと藤原せよと

後二位頼政

人あふぬ大因山のやまもつらふとわんごうの心とるる

中納言教盛

今まの心をあはれ世の中と夏の月ととるる

後五位守仲綱

牙のうねもあらし程きあらきまのつらねとけの

藤原平経盛

難波原のなごの藤原よはつとて朝の幸とて

平忠彦

秋色よけは庭の月を移しねとむらゝの秋は花を

平重衡

何れもしなき秋のまゝとて秋と芳る思ひとる

平賢盛

中くも秋のまゝとて秋と芳る思ひとる

後五位行盛

秋色よけは庭の月を移しねとむらゝの秋は花を

平經政朝臣

酒よりうきまきとてあつてうきまきとてわきのけいのり

修驗寺派義經

いせ一海や堤^{シム}松神の月影と映りあはれし

第一系季 梶原

秋風はまの木の葉をうつして思ふ顔色の葉をうつし

鎌倉右大臣

夕暮ハ衣巾啼し高海の庵との宮乃 秋乃もの

平 泰時

春乃中の麻のあやなくぬるうんのち ^{ヨミナ} 乃

淨光行

武隈の雲乃ミよりもうつと流てちとるまきとて人な

源親行

後よりてきぬ。通月乃つものうきまきとてあはれし

蓮生法師

化り乃思ひ一人の命とて花とまき情みまき

平 重時朝臣

思ひあはれたりのぬきまきとて流れぬとて人のよき

平 政村朝臣

けしきとしきり割きのまきとてあはれしとて出づ初

仍念法師

まきまきの誰より里つる白き車きぬ一定まき風をぬく

真昭法師

定めまき割ぬのぬきのうきとてあはれしとてあはれし

源義氏 足利

いしきぬきまきのぬき風とてあはれしとてあはれし

平惟貞朝臣

大井川水も秋を告ぐるこころいふ波

左近將監平義政

まづもて又ハ海もわきまを惟ふつてさうつて

平一貞時朝臣

吹きわたるしきも山の間乃松より高くいつる月影

若原頼氏

世を捨てぬ子さつこころをさうりし縁の事を移すむ

伯耆権守源具

願ふ立重もかきそそき大井川あじふまふる花のさく浪

若原範房

見し友ハあつるそふりて同ー世を老の命のちり砂に

寂阿法師 菊池

古くより今も大井川の命ハあつて人の秋とゆふ世

源義貞朝臣

秋風の浪も宿る朝もこころあつて雲井の月をさく

源高氏

おーこころいふまゝも山吹の花ちる里のまをさく

源直義 足利

いつともさうこころのこころ日ーく山原もさく月をさく

源義詮

まゝも浪もあつて折席のちさつるやうなまをさく

源泰氏 足利

さうも本もさくおの風のまをさくはくまげのさ

たの普通 足利

古も今も大井川の秋をさく人のまをさくはくまげのさ

上野外多木

高とてハむししはもとを脱しは老乃録は高の月録

と秋重能

とんたもあつるやんきうひつちよものを頼の夕暮の光

源清氏 細川

春とて秋はくつる時あふ木の花よりくつるを木は

高階師を

源頼之親長 細川

あつちなるむのうちや松蔭のあつちも杉原のうちも

陸奥丹氏 山名

わさとしはうさもこのまねあふいさふめう新松原

源義将朝長斯波

まき松蔭あつちの中もあつちの時も

源棟義

あひしや身の時つゝさやまふさして海原の勢い

源貞世今川了俊

秋さぬに萩のまふちひ風の音もあつちのうち

多良良義弘朝信

日影のうちのまふちひあつちのあつち

源重基朝長

むらさき尾葉の袖もあつちの秋のうち

源義持

まふちのうちのまふちひあつちのうち

源大納言源義嗣

あつちのうちのまふちひあつちのうち

源頼元

あつちのうちのまふちひあつちのうち

源重光 佐々木

あつちのうちのまふちひあつちのうち

源俊信 梶井

あつちのうちのまふちひあつちのうち

源俊親 佐々木

あつちのうちのまふちひあつちのうち

源海之細川

ついで金雲のよきものいつうきやうれき山樞那

源持信一色

秋めうき小枝く法界の香ううきあやう虫のさ

三位源義重斯波

えかの川家よりるに雲も積りて波と又や降らん

源範政船長今川

一めみしかこのくわゆるかるるれ其にたふとふとふをさうん

太明法師

れさうふかむいふいふをぬるふの夕暮の光

多々良持世大内

さうふはさぬ神師の浦千鳥いふふとて藤花ふん

平貞國

るのきれはききありととてさるるを教る金板の園

慈昭院

うきさうふあけりれ多るそやのわくとらひをさし

源茂親

友らさきさきや枕のけちもや若とらる白ひたるん

源徳院源大政大臣

るも若きいふし初雁山ひさしきさきさき

惠林院源大政大臣

目と添くく袖の添もせきあつてさるるのさきさき

一葉のあひもさうとてさきさきさきさきさきさきさきさき

もさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

あきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

いづれも、ちやうど、やゝと考へむしの人、この風儀を、びな
に、福

誠也細碎也白虎通作薄

細業

一 山科のうへはなれたる^{細業}は秋子^五のうへは道ゆく人金のいうる感とわきし
たうとふきうきいあ^五はあうりうびてわきんは何事もしとあきく
しきふあふもむう^ヨうき^ヨあひつるふとさる事^ヨあひてわきたさふ
きつるもといひるらんこの人き荷^カ貴丈^キた^人

自注漢儒此經學として史術と云ふは一國と云ふはの賊^{ツク}元年
湯武とて證據と云ふを^{ツク}の事と云ふ

一ある村屋のついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは
さういふ考へよとの國のついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは
角せよあれが^{ツク}と云ふは一むのついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは
あつて^{ツク}のついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは
氏の事^{ツク}と云ふは一むのついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは
よき^{ツク}と云ふは一むのついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは
郭橐^{ツク}と云ふは一むのついでに人氏と云ふは一むのついでに人氏と云ふは

學者なりきとたゞふあゝとい

氏和事始と作り本州洞注と引氏烟草れ功計りと云々

一 或人同日卒の俗を記する紙を帳と云帳はそれのみならずて帷帳乃
やうなるものなりを記録の名を用ふ事いづく昔回後漢の桓帝の
時いづれ賣買する市中はこころもあんな多忙と張て友人の役事ある途
とちつ時は賣買と云者の賣物見たりて賣買者一日は千金と細る杯
文人の称文の辞ありけりはのちの賣買者といふ所の賣買と事なるは竹虎と
いふなりは暇なりしゆりかの綿帳の端よりある記といふなり是より
世人はちける賣買の記録と帳といふなり日本もそ帳と云ハ後宇多院の
時よりと云々なる志るハ帳の字の記録より用ひてハ賣買の記は用ひ
べし兩漢博聞別録にあり且和俗由来記に牒の字と書ハ是ハ牒なり
牒は日本の狀の字の正字なり

一 信長と云はてはそ常強智孫の名ある者と持ゆせらるる源氏と云と
云々の中は細田氏に安藤と勝と云ふハ細田又その最へと稱する信長

紀伊の雜賀孫平曰若ぬハ兄貴は説て降らうんとい使とあるは使帰
らぬを教ふるや留らぬやの事なりと明らハ信長と云ハ細田氏と云
ハ今ハ細田と云ハ細田は信長と云ハ信長は信長と云ハ信長は信長と云
ハ細田の種と云ハ細田信長孫平曰て曰ハ使といふ孫平と云ハ
是ハこれと教ハ信長の曰ハこれと教ハ孫平曰て人路歩多くハ
つとて事なりと云ハ馬はなりと云ハ城門を叩き信長の使と稱し
て言誇也驕なり詩て是と稱殺せんといふものなりといハ本九と云ハ九の
き門を閉前後より取こころと云ハ信長の曰ハ何ハ何ハ細田
殺さるる孫平曰細田を殺さるる體をドメの使と云ハ是ハ是ハ是ハ是ハ
内と云ハ勤まハ信長の使といふハ是ハ是ハ是ハ是ハ是ハ是ハ是ハ
お立質素なりと歩士は十人計つとて城の外の馬を馬下りといふ人
し若黨二人ハ履取一人具し威儀と云ハ是ハ是ハ是ハ是ハ是ハ是ハ
感じ自分門を閉きお還ハ内ハ招く口と云ハ是ハ是ハ是ハ是ハ是ハ是ハ

此中涙を流しきくは涙脚つくくもあてなかりともなほと父の仇うくごうき
兄吾劔術の才と心をも教へ試みは方々ありて思ひ入る志なきは劔術と
程なく進みゆく夫帰郷いさう物せう二年^年及て主人云るハ愛まのし人なり
主人と親多し撫^{カエ}て仇と存のまがりと撫つと心と付くしハそれう

市中は隠色店、世帯と少

伴光曰梯クハと守るとのことなり何事ぞと云

昨乃云及此の事貴と云ふべしは其のえとてその目録モロコシあらは
あさましきおひ入と梯と酒の事と富言のことも也むし山うの山と
おてなるをいふ貴を先サキひしをさうりやうのやうにあるあての木の
あまをいふとて死しう彼山の是とておひさういふとて希代
不忠候ることあがけ本のふき先うの逃イナモツれなりとゆふての先と
さうてうそれう孫のおもひうの木のあての事なりて木のあてう
なる先とひろちんと終日おひうなるらんは山うの事なりひは仙と
世なる事なりういふ富言しれまの逃イナモツれと愛人御しう然中
いふは仙なる大なる逃イナモツれは仕合よくある事なりぬぬぬ我々おひ
是もそこの御しとおひ又仕合を思しく貴族なりてハ我々ぞとて
おひを御しとて人とおひ天とてける事一人毎の逃イナモツれは仕合よく
くあまうなるも運命の事なりて我力の事なりては仕合よく

く貴族なるも運命の事なりて親の事なりて人の事なり
さよちてはもとより天道のあやまりの事なりてはもとより貴族あるも
貴族あるもぬる事なりけるといふる事なりけるも武篇あるものなり
なく兵の事なりげ武篇あるものなりてはもとより逃イナモツれは仕合よく
の武篇とては逃イナモツれ武篇あるとおひは逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれ
武篇ある武篇あるとおひは逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれ
篇あるとおひは逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれは仕合よく
てうとては逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれは仕合よく
惟とては逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれは仕合よく
逃イナモツれの事なりては逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれは仕合よく
よひといふとあまうは逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれは仕合よく
て人とおひは逃イナモツれは仕合よく武篇とては逃イナモツれは仕合よく
日本の備すは貴族文を有するものなりしおひは武篇強き士大なりて

文章藝能なりし者も藝能なりと云ふなり武篇のいふところもよくて能く
とひてとし物より場所を記しお祭りの神のまかしとて武通するものなり
ゆへともしる風俗也かくのごくある風俗と云ふなりとありとありし
の事とありとされは武篇の青々武篇なるし様とものなりとありとありと
云ふなりとあり

仲亮曰孝經大學中庸は八武篇の初一と云ふなりや

仲の曰三經の中は孝經と説き及て後漢書と説き及てこの武篇
の教也されは孝の忠義のさめようせきとて後漢書と武篇となつて
孝行忠義と云ふことなる働のけいなる人又き忠義と云ふことなる
なり武事なる事なりと云ふ人まれなるなりと云ふ武篇者なりと
云ふ風俗なりと云ふなりと云ふ曾子曰武陣は常勝也この武範
のころは思ふむは武理と云ふは孝徳の感通する君の思ふ親乃
親は思ふなりと云ふ大なる思徳なり忠義なり孝子の門よりあるもの

あはれ孝徳なりと云ふ者必は武陣はあはれ武篇と云ふ所なり武陣と云ふもの
也としは孝行忠義のさめようせきとて後漢書と武篇となつて
孝行忠義と云ふことなる働のけいなる人又き忠義と云ふことなる
なり武事なる事なりと云ふ人まれなるなりと云ふ武篇者なりと
云ふ風俗なりと云ふなりと云ふ曾子曰武陣は常勝也この武範
のころは思ふむは武理と云ふは孝徳の感通する君の思ふ親乃
親は思ふなりと云ふ大なる思徳なり忠義なり孝子の門よりあるもの

仲亮曰孝經大學中庸は八武篇の初一と云ふなりや
仲の曰三經の中は孝經と説き及て後漢書と説き及てこの武篇
の教也されは孝の忠義のさめようせきとて後漢書と武篇となつて
孝行忠義と云ふことなる働のけいなる人又き忠義と云ふことなる
なり武事なる事なりと云ふ人まれなるなりと云ふ武篇者なりと
云ふ風俗なりと云ふなりと云ふ曾子曰武陣は常勝也この武範
のころは思ふむは武理と云ふは孝徳の感通する君の思ふ親乃
親は思ふなりと云ふ大なる思徳なり忠義なり孝子の門よりあるもの

仲の曰三經の中は孝經と説き及て後漢書と説き及てこの武篇
の教也されは孝の忠義のさめようせきとて後漢書と武篇となつて
孝行忠義と云ふことなる働のけいなる人又き忠義と云ふことなる
なり武事なる事なりと云ふ人まれなるなりと云ふ武篇者なりと
云ふ風俗なりと云ふなりと云ふ曾子曰武陣は常勝也この武範
のころは思ふむは武理と云ふは孝徳の感通する君の思ふ親乃
親は思ふなりと云ふ大なる思徳なり忠義なり孝子の門よりあるもの

源の義経とて印の時義経とて軍法を學びしはつるまゝとて陳平の功は
りきとて本曾友とて八平家の一族とて度々の合戦に勝利を日なりとの比
類なき右大將也かくのおとくる備漢のゆるきため——と能くかんづく城の
道理とありきむしき——のせとつる大將とて——なり歟と病と
士卒と美味也倫の法と藥法也現處用周の武畧ハ四診の医術と
奇正のともへ歟とつて將化たるを攻補の藥方やひは仍て施し
とし軍法とせしとある大將を医者とせしとある者も療治
はるがとし是き事なりべし陳平の功も倫の功もなりとてなりぬるのまじきとてこ
——なりひる大將を藥方とせしなりえ、病功の入る處ぶき——の如
し軍法の學問なき大將運命のいきなりはよく弱き歟なりとありて勝利
と將也とて威をふるきとありせしなりはなりとてなりはなりとてなり
なりとて病人はなりとてなりとて藥代なりとてなりとてなりとてなりとてなり
たるなり張良韓信項羽諸葛孔明義経などのとて學問とてなり

軍法の妙理とよく増えしと百戦百勝の功とてなりとて醫學よく極め
四診の妙術とて陳平とて百戦と療治し起死回生の功とてなりとてなり
鶴倉公東垣丹溪など如きの右医のとし軍法とてなりとてなりとてなり
の機轉なく武用はなり大將を醫書とて廣く學びても變通の医
按はよく療治とてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり
醫學よく療治とてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり
おとく起死回生の働きあるなりとありとてなりとてなりとてなりとてなり
武用はなりとありとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり
如く百戦百勝の功とてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり
侍亮曰運命とて強きなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなりとてなり
昨の曰合戦の勝負は徳のうち才のうち力の勝運の勝とて四徳のたより
あり徳とてなりとて武合への明徳の事なりとて武畧なりとて人教とて自由自
在なりとて海はし歟の情とよくなりとて九天の上なりとて九地の下なりとてなり

ある人なり本づつての上は文武藝武藝はけり守宝に本末先後の心得
簡要あり

倅亮曰本末の心得はこれなり事なりと云ふものなりと云ふことなり
師の曰本と撰て本と云ふべきなりよくは文武藝と云ふべしと文道よく
おこしは武藝と云ふべしと武現と云ふ人なり本末の心得はこれなり本と
云ふことなりと云ふことなり

倅亮曰況常を居る多しと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
用はこれなりと云ふことなりと云ふことなり

師の曰これなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
衆のさだめなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
このは勝るなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
徒るなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
心の常性なりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり

倅亮曰軍法はこれなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
のありと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり

師の曰軍法はこれなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
たふはこれなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
よことなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
なり旗旗金鼓各具のこしなりと云ふことなりと云ふことなり
髪なりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
おとつと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
用ひの心得はこれなりと云ふことなりと云ふことなり
たは膚毛髪なりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
時より人なりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
べしと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり
うはひなりと云ふことなりと云ふことなりと云ふことなり

右是寬政乃古來之
書畫及古之文化十
七日清書院

河合武八郎 寄臣

馬



10
1979

